



書評 山下清海編著：『現代のエスニック社会を 探る：理論からフィールドへ』

著者	川瀬 正樹
雑誌名	地理空間
巻	4
号	1
ページ	72-75
発行年	2011
URL	http://hdl.handle.net/2241/00151394

山下清海編著：『現代のエスニック社会を探る－理論からフィールドへ』学文社、2011年3月刊、213p., 2,400円（税別）

はじめにお断りしておかなければならないが、評者自身は、エスニック社会に関する研究者ではない。評者のような者が、エスニック社会について勉強したいと考えたときに、それに応えてくれるのが本書であろう。

本書のはしがきは、地理学を志し、かつ教育する我々にとって、衝撃的とも思える書き出しで始まる。「最近の若者は保守的になってきた」「日本にいる外国人は好きではないです」というように答える学生が少なくない」。確かにそうである。韓流ブームや海外旅行の普及など、一見すると異文化理解が進んでいるように考えがちだが、一方で若者の保守化は確実に進行しており、特にインターネットの掲示板等の書き込みをみると、その保守的、排他的、差別的記述に目を覆いたくなることも少なくなく、評者はこの事態を憂慮している。そもそも、昨今の韓流ブーム等や海外旅行の普及はあくまで表面的なものに過ぎず、歴史を含めた異文化理解が進んでいるとは思えないところも多い。本書は、特にエスニック社会形成の歴史的経緯に関する記述が多く、それぞれのエスニック社会の成り立ちに関する理解、ひいては異文化の真の理解を進めて行く上での一助にもなるであろう。

本書は基礎・総論編と事例編の2部構成となっている。I「エスニック社会を探る－景観・適応・居住の理論－」では、まず第1章「エスニックという視点」（山下清海）では、「エスニック集団とは何か」から、エスニック社会を捉える空間的視点、生態的視点、景観的視点の3つについて、初めてエスニック地理学に触れる読者にもわかりやすく解説されている。

第2章「記憶と戦略としてのエスニック景観」（加賀美雅弘）では、エスニック景観のもつ2つの意味、すなわち、①構成メンバーの集団への帰属意識を強めるためのもの、②集団以外の人々が集団へ関心を高め、政治的、経済的、社会的な利益を集団に提供する機会を得るためのものがあることを指摘し、ウィーンにおける「記憶の石」の設置をはじめとする景観の修復と記憶の景観化や、巨大モスクの建造によるイスラム社会の存在の主張といった、自己主張の戦略としてのエスニック景観についても解説している。

第3章「エスニック集団の言語景観」（石井久生）では、言語景観にエスニック集団のアイデンティティやナショナル・アイデンティティが投影されるため、言語景観とアイデンティティとの関係を扱った研究が多いことを指摘したほか、人種化、ジェンダー化、商業化といった文脈から言語景観にアプローチする方法の存在も指摘した上で、国境付近の地域、いわゆるボーダーランドの再領域化について言及している。

第4章「移民の適応戦略－南北アメリカのエスニック社会の比較」（矢ヶ崎典隆）では、ヨーロッパ人による北アメリカへの移住と植民を研究するために、文化生態学の適応の考え方を導入することが有効であると指摘し、特に「前適応」について、事例をあげて詳しく説明している。さらに、南北アメリカにおける日系社会を比較する中で、カリフォルニアとサンパウロに流入した日系移民が前適応しており、農業協同組合の導入が適応戦略の一つであったが、カリフォルニアが北西ヨーロッパ系小農経済文化地域であったのに対し、サンパウロがイベリア系牧畜経済文化地域とプランテーション経済文化地域であったことから、異なる日系社会が展開したと説明している。

第5章「移民集団のセグリゲーションとエスニシティ変容」（杉浦直）では、セグリゲーション

の意味、要因、影響について解説している。セグリゲーションが空間スケールに依存する現象であり、スケールの議論を絡めてはじめてその意味を語ることができること、その内容については、均等性、露出、集中、中心化、集塊性の5つをセグリゲーションの次元として区別して測定しなければならないというマッセイ (Massey, D.S.) の主張を紹介している。また、セグリゲーションは個人の居住地の選択傾向や社会構造の制約が複雑に絡み合う現象であり、単純に1,2の要因に帰結できないことを、複数の研究事例をあげて指摘している。さらに、脱セグリゲーションと空間的同化モデルについても、マッセイの理論を解説している。

第6章「集住するエスニック集団－エスニック・エンクレーブの形成・拡大」(大島規江)では、「ホスト社会からみて異質な人々の居住地」を意味する「エンクレーブ」について解説している。さらに、エスニック・エンクレーブの形成・拡大要因として出生率と都市内居住地移動をあげ、先進諸国では、マジョリティの出生率は相対的に低いのに対し、エスニック集団のそれは相対的にも絶対的にも高いこと、都市内居住地移動についてはオランダの事例を紹介し、1990年代の経済好況がマジョリティには移動率を上昇させる要因となったのに対して、エスニック・マイノリティにはむしろ経済不況ともいうべき状況を生じせしめ、移動率を低下させる要因となったことを指摘している。

Ⅱ「フィールドから見るエスニック社会の諸相－世界・日本の事例分析－」では、8つのエスニック研究の事例が収録されている。第7章「アメリカ合衆国ハイブレーンズの開発と移民社会・ホスト社会の動態」(矢ヶ崎典隆)では、アメリカ合衆国ハイブレーンズへの移民流入の過程について説明している。牧畜経済が形成された結果、ハイブレーンズがアメリカ先住民から白人の世界に変化

し、その後、テンサイ栽培の普及に際して流入したロシア系ドイツ人である「ボルガジャーマン」が流入したこと、1980年代になると、テンサイから牛肉への転換が起こり、その労働力として、ベトナム人を中心とした東南アジア系難民が雇用され、東南アジア系社会が形成されたこと、さらに近年では、エスニック社会の主役がベトナム人からビルマ人に変わりつつあることを説明している。

第8章「シアトル初期チャイナタウンと中国人移民社会」(杉浦直)では、シアトルのチャイナタウンの形成過程について説明している。現在のチャイナタウンはインターナショナル地区にあるが、もともとはそれより西側の海岸通りに位置していたとし、1885～1916年の中国系施設の分布図を示しつつ、チャイナタウンの位置とその業種構成を丹念に追っている。その間、反中国人暴動(1886年)で中国人が減少するが、シアトル大火(1889年)後に南ワシントン通りのチャイナタウンが復興し、1911年以降、南キング通りに中国系施設の進出が始まり、新旧チャイナタウンの競合が戦前期遅くまで続いていたこと、1910年段階ではチャイナタウン域外にもそれに比肩する数の中国系施設が立地していたことを明らかにしている。

第9章「ホノルルにおけるエスニック構成とその変容」(飯田耕二郎)では、ハワイがどのエスニック集団も過半数にならない多民族社会であり、その要因がヨーロッパ社会との接触によるハワイ先住民人口の激減と、白人企業家たちが始めた砂糖きびプランテーションのための労働力として、おもにアジアからの移民を導入したことをあげている。ホノルルのエスニック構成では、19世紀まではハワイ先住民が最も多かったが、1910年には白人、1920年以降1990年に至るまで日本人が最多数を占めているという。さらに、居住地域

の特色として、白人は丘陵地の住宅地や沿岸部の景勝地に、日本人を中心とするアジア系の居住区は低湿地の縁辺に広がってきたことを指摘している。さらに、1910年度から1940年度までの職業上の特色として日本人は当初から家庭・個人雇用にかかわる仕事が多く、次第に商業関係の仕事に進出したことなどを説明している。

第10章「イタリア・南ティロール地方におけるエスニック文化と観光地化」(加賀美雅弘)では、北イタリアの南ティロール地方に住むドイツ系エスニック集団の事例を取り上げている。政治的にも社会的にも不安定な地域として位置づけられてきたが、1970年代以降、エスニック集団の社会的地位の安定化が進められたという。さらに、エスニック文化を観光資源としてとらえ、イタリア国内でも特に観光業による経済発展がめざましい地域であるという。EUによる地域統合により、国境を越えた人や物の移動が急速に自由化して以降、この地域が求心力をもつようになったと指摘している。

第11章「アムステルダムにおける都市内居住地移動」(大島規江)では、エスニック集団の都市内居住地移動について考察している。歴史的に多くの移民を受け入れてきたオランダの最大のエスニック集団はスリナム系住民のであるが、アムステルダムでは近年、イスラム系のモロッコ系住民の人口がスリナム系人口に迫っているという。都市内居住地移動をみると、マジョリティは同一ゾーン内での移動が卓越するのに対し、エスニック・マイノリティは、外方移動が活発で、同セクターからの移動が顕著であること、マジョリティ、マイノリティともに、中心市街地区から郊外地区への移動は少なく、移動の主流は近距離移動であると指摘している。

第12章「バスク自治州に見るボーダーランドの言語景観－基礎自治体名称バスク語化の事例から

－」(石井久生)では、地名のバスク語化を取り上げ、特に選択を前提とする「バイリンガル地名」という新たな命名手法の登場によって、地名のバスク語化が加速していったことを明らかにしている。また、エチェバリの名称変更を事例として取り上げ、4度の名称変更の経緯を説明している。

第13章「グローバル化とインド系移民社会－脱領域化と再領域化の概念の提唱－」(澤宗則)では、インドのIT技術者の国境を越えた双方向の流動性が高く、これにより、ナショナルスケールでの脱領域化が進んだことを指摘している。1980年代以降、インド人IT技術者のアメリカシリコンバレーへの移動がみられたが、ITバブル崩壊後、失業したインド人IT技術者は帰国した。やがてベンガルールが、アメリカのシリコンバレーの下請け先として選ばれた結果、同業者間が近接して立地し、IT産業のクラスターが形成され、再領域化が進んだ。日本のインド系移民社会でも、IT技術者を中心としたニューカマーたちの新しい集住地となった東京・西葛西では、移民たちの「場所」が形成され、ローカルな空間の再領域化が進んでいる。このように、移民の空間では、流動性を示す脱領域化とローカルな文脈に即した再領域化が同時に進行していると指摘している。

第14章「東京都在留中国人の増加と分布の変化」(山下清海)では、東京都在留中国人の分布とその変化について考察している。人口増加から時期を第1期：停滞期(第二次世界対戦終了～1978年)、第2期：急増期(1979～1988年)、第3期成長期(1989年～現在)に分類している。第1期は、台湾人が中心で、ほかに三江人、広東人も多かったが、第2期になると、上海市、北京市、福建省出身者が急増した。さらに、第3期には、東北3省出身者が著しく増加した。中国人流入増加の最大の原因は就学生の増加であるが、東北3省についてはそれに加え、中国残留日本人とその家族の帰

国・来日や東北3省の朝鮮族が日本語学習のために多く来日しているからだという。急増期には池袋と新宿に集住地区を形成していたが、成長期に入ると、郊外化、定住化が進展し、その構成も急増期の老華僑+新華僑から、新華僑中心に変化してきていることを指摘している。

また、本書の特長として、各章末にあるコラムがあげられる。このコラムは、それぞれの章を受ける形で具体的なトピックを取り上げて書かれており、各章の内容をより深く、わかりやすく理解するための一助となるであろう。特に、学生向けの講義に使用するトピックとしては、最適ではないかと思われる。

以上、本書の内容を紹介してきたが、評者にとって初めて目にした事例も多く、それぞれのエスニック社会の形成について、歴史的な経緯を含めてよく理解でき、満足度の高い読後感を得た。特に、ハワイで現在でも日本人(日系人)が最多

数のエスニック集団であるという事実は、ハワイへの日本人旅行者にもほとんど知られていないのではないだろうか。また、それぞれの事例を解釈する上での理論的枠組みについても、大いに勉強となった。

あえて言うならば、本書は基礎・総論編と事例編の2部構成となっているが、基礎・総論編で事例が多く盛り込まれていたり、事例編で理論的な検討が深く掘り下げられていたりして、一部で両者の区別が明確ではないのではないかという印象を受けた。しかし、地理学においては、理論的な説明にも具体的な事例を必要とし、具体例の説明にも理論的枠組みを必要とすることを考えれば致し方ないことかもしれない。

いずれにしても、エスニック地理学を基礎から学び、かつ、研究事例を通して近年の議論に対する理解を深めるには格好の書であろう。

(川瀬正樹)